



# 沖

俳句雑誌[おき]

12月号

沖 発行所

# 城ヶ島

能村 研三

## 大槌町を訪ねて

3・11から八か月が経ったが、先日十月二十四日に岩手県の大槌町を訪問した。

私の勤める文化振興財団では、前理事長が井上ひさしであったことから、この度の東日本大震災を受け、井上ひさし作品ゆかりの岩手県大槌町を支援するために「吉里吉里支援募金」を創設した。これまでに八回のチャリティコンサートを実施し多くの義捐金が集まったため、大槌町の教育委員会に、図書や楽器の購入費としてお渡しするのが目的であった。市民からの楽器もあつたので、千葉から車で現地に行くことになり、片道六百五十キロの道のりを交代で運転しながら現地入りをした。

潮 錆 の 八 丈 す す き 大 揺 れ す  
秋 寂 び の 潮 鳴 り 通 す 小 笹 垣  
和 蠟 燭 め く 灯 台 に 秋 惜 し む  
浜 菊 の 断 崖 咲 き を 矜 恃 と す

私たちは東北道を北上で降りて遠野を抜けて沿岸部の釜石に向かった。途中の遠野の道の駅で休憩、震災直後はここがセンター的な役割を果たしていたそうだ。かつて俳句を作り、二三四訪れている遠野であったが、猿カ石川や六角牛山の風景はなつかしかったものの、この先やがて展開される悲惨な風景を思うと何か心が晴れなかった。途中は被災地の災害復旧用のトラックの頻繁な

「石六」が刻みし歌碑や秋寂びぬ

耀了へし荷受け櫓の秋日影

秋潮に帆の反りありし白秋碑

半生を風と過ぎたり秋の暮

神の留守木の根に添はず結神籤

朝寒や大書きされし寺案内

通行があつたが、山の中は何事も無かつたかのように静まり、木々も色づき始めていた。釜石の街も沿岸部の手前は地震の大きな被害もなく、平穩を装っていたが、釜石製鉄所や釜石の駅があるところからは一変し津波の脅威を改めて知らされた。釜石から車で十五分くらい北上したところに大槌がある。海に面した平地は山際ぎりぎりまで津波が押し寄せ、その甚大な被害を目の当たりにして、しばし言葉を失ってしまった。住宅や商店街の瓦礫はまとめて積まれ、各家々の土台と基礎部分だけが整然と並んでいて、かつて車や人が行きかき活気にあふれた港町は、ひっそりとしていた。けれども、お会いした方々はどなたも明るく、エネルギーで、こちらが元気をいただいたのではと思うほどであった。復興までの道のりには大変に厳しいものがあるだろうが、新聞でも報道されたように、「ひよっこりひょうたん島」の灯台デザインも決まり、町民のみなさんは力を合わせて確実に歩みを進めていることを強く感じた。

# 蒼茫集



山河づきつき

北川英子

鳥渡る山河づきつき傷だらけ  
受難列島颯風のこれでもか  
背負籠にあるがまま活け秋の草  
十六夜の足拭ふ影支ふ影  
肩抱けば失意もぬくし鱗雲  
長居して呉れしやアポなし小鳥たち

頬杖に

千田百里

歯に衣をきせずレモンの香を纏ふ  
頬杖に押し寄せてくる夜気秋気  
疲れ鶉同人協会刊のやうに鶉の島去りて秋  
白秋の惜しみし秋を惜しみけり  
長き夜の宴半ばにて去り難し  
荒鶉寝ぬるは銀漢の尾のあたり

祝祭

辻直美

祝祭の如く鳴子の張られたる  
いちどだけ伊良湖岬の鷹ひとつ  
海に水脈空に銀河や夫恋し  
後の月生きるに苦き正露丸  
また少し縮まる背丈秋すだれ  
露けしや李朝の壺にピアノ線

月の道

宮内とし子

鎮魂の海にひと筋月の道  
星月夜虚空は海につづきけり  
月山の奥へ奥へと木の実踏む  
容赦なき岬の風の花すすき  
礁打つ波や磯菊低く低く  
鱗雲旅の疲れは二日目に

重たき色 吉田政江

にがり酒三半規管あるを知る  
二番渋重たき色となつてきし  
何の实と問うて秋日にかざしけり  
晩秋城ヶ島修行三句の利休鼠の波荒るる  
白秋碑秋光亡びはじめぬし  
天高し火の島へ向く風車二基

澄みわたる 田所節子

発電風車くるくる岬澄みわたる  
秋潮に色飛ぶボードセーリング  
かなかなや水底に似て森の日矢  
ワイパーの負けん気を見す野分中  
山の日に方眼咲きの曼珠沙華  
鹿鳴西子山ける仏の山に先師句碑

秋の色 大川ゆかり

台風圏なかなか開かぬ瓶の蓋  
白桔梗作法守りて咲きぬたる

いでゆ坂ゆるゆる秋日濃くなりて  
飛竜頭の切り口秋の色したり  
からすうり黙つてをればいいものを  
秋日傘とほくの海のまぶしくて

秋怒濤 遠藤真砂明

爽やかや男が海へ出尽くして  
根釣岩より太陽へ竿鳴らす  
大撫網の陸揚げさんまどつと散る  
海鳴りはたつきのリズム大根蒔く城ヶ島同人命懸合句  
秋晴の水平線を引き直す  
半島は男の拳 秋怒濤

レクイエムミサ 荒井千佐代

前山を雲の動かぬ菊雛  
声かけて開くる子の部屋夕月夜  
虫の夜の左右に揺れつ皿沈む  
小鳥来るレクイエムミサ弾きをれば  
人の死のたびに諸蒸す隠れ村  
亡き父母を未だに頼り稲の花

かそけき 辻美奈子

折鶴の首立ちあがる九月かな  
かたむけて秋の日傘となりてぬし  
吾亦紅殖ゆその夫を恋ふ母に  
残る虫かそけきちからつかひけり  
かなしみに色さしてきし冬夕焼  
秋蝶のつひの高さと思ひけり

乗鞍 上谷昌憲

天高し木の間隠れに槍ヶ岳  
岩桔梗雲に波あり渚あり  
少しづつ夕映こぼす芒原  
一山を覆ふ這松霧湧けり  
爽やかや乗鞍を統ぶ剣ヶ峰  
無尽蔵とは乗鞍のいわし雲

段ボール 安居正浩

のうぜんに触れなば遊びではすまぬ  
段ボール行進文化祭間近

去年とは違ふ花野の雨となり  
どんぐりの落ちてころげて拾はるる  
山に入るもう霧濡れの案内板  
秋の虹卓に二つのミルフィーユ

陰干し 菅谷たけし

島に来て八丈芒ときく哀れ  
鳶は弧に雪来し富士を抱へけり  
釣糸を垂れて秋思を囲ひをり  
秋の潮退いて灯台ひとりぼち  
どきりとす事の減りたり曼珠沙華  
秋遍路満願の衣を陰干しに

蔵王 杉本光祥

蔵王恋し茂吉恋しと小鳥来る  
蔵王嶺に雲の湧き立つ稲穂波  
上陸の台風韋駄天走りかな  
ななかまど剣岳は遠き山となり  
豊秋のポケット多きチョッキかな  
半島は先の先まで大根畑

抜け道 細川洋子

天空に抜け道なかり鳥渡る  
ゆふぐれは触媒のとき酔芙蓉  
豊秋の首の据りし赤ん坊  
人待ち顔ことさら後のころもがへ  
星あまた研ぎ澄まされて野分あと  
膝は発条秋氣を上る女坂

風 岬 藤原照子

城ヶ島大橋秋潮をひと跨ぎ  
半島の挟む半島雁渡し  
椿の実落ちて弾けて風岬  
白秋忌近し島の碑露けしや  
灯台と安房の対峙や秋潮路  
半島の浦々巡り秋惜しむ

花野人 北村幸子

小流れをぼんとまたぎて花野人  
鯛雲椅子あれば友増えてゆく

嶺線の映えて秋日のすべり台  
石仏の満身ほてる曼珠沙華  
此処に人住みし証や咲く小菊  
時代祭武士の世のいる豊かなり

半濁音 千田 敬

荒磯波秋を惜しめと白尽し  
行く秋の宙にとどまる鳶自在  
橋脚に行く秋嵌めて碑影伸ぶ  
潮騒は地球の鼓動秋惜しむ  
何か居る居るはず秋の忘れ潮  
秋澄みて鳶の啼き声半濁音

四半世紀 楠原幹子

桐一葉昼の月よりはがれしか  
百葉箱発光体となり素風  
一人ごとのやうに古稀きて白桔梗  
白秋をしのぶ素秋や帆型の碑  
すさまじや鮪の目玉拳ほど  
俳歴の四半世紀や実むらさき

# 潮鳴集



閉ぢぎはに

甲州 千草

種を採る視力聴力明るくし

撮さるるそこが正面曼珠沙華

怒つてゐるやうな今年の紅葉山

閉ぢぎはにふつと秋思の粉袋

怪獣のもぐつてゐたり羽蒲団

履 歴

河野美千代

断崖は地球の履歴秋の潮

お似合ひの帽子の皇后秋の山

読み聞かせの声洩れてくる秋簾

牛乳瓶の底にうつすら白い秋

こともなげに菜は間引かれて雨催ひ

さねさし相模

大沢美智子

耕二の新宿見むと高きへ登りけり

秋高し真昼の糶り場がらんどろ

秋潮のさねさし相模よく晴れて

ト口箱に鮪のかぶと鎮座せり

海光へ三浦大根翼張る

吾亦紅

石川笙児

もう妻に喧嘩は売れぬ吾亦紅

衣被運は呼ぶもの手繰るもの

ジオラマも芒の原にかはりぬし

芒原出でて一気に老けにけり

天の川金の卵も老いにけり



# 沖作品



## 能村研三選

かなかなの鳴き警備員交代す

岩手

浅沼 久男

角錐の底に村あり星月夜

地震続く太古の海の夕焼くる

秋虹の西半分をビルが消す

竜田姫下絵いくつも提げて来る

綿菓子屋色なき風を巻いて売る

秋草や亀の墓掘る子がふたり

釣瓶落し人がぼつんと黒くなる

濁りたる川の力や秋暑し

月を見て月に見らるる未来都市

節電のおかげおかげとゴーヤかな

小鷺百翔びたつ刈田祝ひめく

生中継の「宇宙の渚」虫の夜

脱衣所に竿一本の星月夜

銀漢の尾にふれ駿馬召されけり

千葉

清水佑実子

市川市

佐野ときは

朝顔の折日正しく開きけり

スカイツリージャックと豆の木めき晩夏

稲光みな真つ白になるオセロ

どの指もやさしくなりて桃を剥く

赤とんぼ誰も遊ばぬすべり台

地上地下東京の街縫うて秋

豊の秋綿噛まされて齒科にあり

冬瓜のやうなごろ寝をしてみたし

今日の月ビル街の空広くせり

送らないでね月の兎と帰るから

葛の花別れはいつも不意に来て

安全と言はるる不安曼珠沙華

破れ芭蕉避けて通れぬ老ならば

焼香のどん尻にゐて昼の虫

田仕舞の煙たなびく峡十戸

東京

中田とも子

市川市

七田 文子

東京

能美昌二郎

# 沖作品 15句選評

\*  
能村研三

かなかなの鳴き警備員交代す

浅沼 久男

日常の素材を、何の技巧もなく詠んでいるところに、この句の良さがある。句意も難しいことは言っておらず、何でもないようなことかもしれないが、俳句はちつともなんでもなくはないのである。「俳句はこういうものさ」と教えてくれたような気がする。公共施設のような建物には必ず定期的に巡回する警備員がいる。夕方近くであろうか、建物の外ではしきりにかなかなが鳴き続けている。そんな中に警備員の交代が行われた。お互い制服に身を固め律儀な敬礼を交す。その何でもない風景を平明に描いている。しかし、日常の平凡にこそ実は人の幸せがあるように、俳句のよさも意外にこんなところにある。平凡のよさを平凡にすくい取って、それがきちんと作品として成立するというのはまさに俳句ならではの機能と思う。この平明さにこそ価値がある。

月を見て月に見らるる未来都市

佐野ときは

月は昔から詩歌に雪月花の一つとして詠みこまれてきた。今年NHK学園の教室で仲秋の名月の日に月見句会が行われた。佐野さんの句もその時の句である。現代人の月の見かたも変ってきているが、探査衛星「かぐや」が日本から月へと打ち上げられ、まだ見ぬ素顔が明かされようとしている月。そんな「新しい月」から生まれる二十一世紀の世界観を俳句で表現した。中七の「月に見らるる」という措辞が新しい月への世界観である。

節電のおかげおかげとゴーヤかな

清水佑実子

今年節電対策としてゴーヤの緑のカーテンが流行った。日常生活における節電が私たちに求められ、様々な取り組みが行われた。その方法の一つ、家の窓や壁面を植物で覆うことで室内の温度を下げる「緑のカーテン」である。ゴーヤ側から見れば、こんなに注目された年はなく、ありがたい気持もある。それが「おかげおかげ」という表現になった。

稲光みな真つ白になるオセロ

能美昌二郎

オセロゲームは、縦横八つずつ計六十四のますの盤と、白と黒の二面の丸い駒を使う二人用のゲーム。必ず相手の駒を挟むように交互に駒を置き、挟んだ駒を自分の色に変えてその数を競うもの。照明の消えた部屋のオセロ盤には白と黒の駒が並んでいたが、窓から差し込む稲光の一瞬の閃光にすべてが真つ白に見えた。発想が中々ユニークである。(以下略)